

第五章

〈卑彌呼ヒミコ〉という名の探索

——併せて册封体制サクホウタイセイからの独立と

国名および天皇号——

いざ子ども 早く日本へ 大伴の

御津の浜松 待ち恋いぬらむ

〔山上憶良(万葉集63)〕

「さあみんな、早く日本へ帰ろうではないか。出航のとき航海の安全を祈ったあの大伴の御津の浜の松も、われわれの帰りを待ちこがれているだろう。

(御津は大阪難波の港。遣唐使の一員として唐に派遣された山上憶良の望郷の歌)」

大和路は 雲隠りたり しかれども

わが振る袖を 無礼しと思ふな

〔遊女兒島(万葉集966)〕

「大和への道は雲の彼方に隠れていますが、私が振る袖を無礼だと思わないで下さい。

(太宰府から都に帰る貴人との別れを惜しんで地元の遊女が謡ったとされる。天皇の歌と遊女の歌と同じ歌集に並んでいるところが『万葉集』の凄さである)」

五・一

『^キ記^キ紀』のどこを切っても

出てくる〈^ヒ卑^ミ彌^コ呼〉

この節では、〈^ヒ卑^ミ彌^コ呼〉の読み方と、それに対応する名前が『^キ記^キ紀』にあるかどうかを検討してみよう。

◎ 〈^ヒ卑^ミ彌^コ呼〉の読み

本書では〈^ヒ卑^ミ彌^コ呼〉に「^ヒヒ^ミミ^コ」というフリガナをつけているが、それはそう読むのが今では一般的だからである。

しかし昔の人がそう読んでいたかどうか、また元の日本語の発音がどうだったかについては、諸説がある。

作家の井沢元彦が調査したところでは、この漢字は、昔のシナの発音では、日本人には「^ピメ^ハ」とか「^ピメ^コ」とか聞こえるらしい。

だからまず^ヒと^ピの違いがあるが、古代の日本語では日は^ヒとも^ピともいったようだし、いまでも月日をガツ^ピというように^ピということもあるので、この読みは「^ヒメ^コ」と同じだといえるのかもしれない。

最近の研究には、「^ヒム^カ」だろうという説もある。

前述のように著者の読んだ古い教科書では、〈^ヒ卑^ミ彌^コ呼〉の左右に二種類のルビをふり、「^ヒヒ^ミミ^コ」および「^ヒメ^コ」としていた。

いろいろな意見があるわけだが、現在の日本の著名な学者のあいだでは、この教科書の二つの読みが定着しているようである。

おそらく、いまの日本では「^ヒヒ^ミミ^コ」や「^ヒメ^コ」と書ける言葉の古い音韻だったのであろう。

もともと古代の発音は、日本のそれもシナのそれも定かでないのだから、あまりこまかな議論は意味がない。

現在の日本人の発音で考える類似は、ごくごくおおまかなものだと考えねばならない。

「^ヒヒ^ミミ^コ」とも「^ヒメ^コ」ともちがうが、それに似たも

のだったかもしれないのだ。

《邪馬台国》と抗争した狗奴国とは九州の熊襲かそれとも関東の毛野かあるいは熊野か岐阜か愛知か、といった議論にしても、三世紀の日本の役人が熊襲や毛野をどう発音していたか、および、三世紀の魏の国または魏の植民都市帯方郡の役人が狗奴をどう発音していたか——がよくは分からないのだから「ひよつとしたら対応しているかもしれない」というていどのことしかいえない筈なのだ、それにしても、多くの『魏志倭人伝』の研究書に、もつともらしい対応が頻出している。

第三章で、『魏志倭人伝』の難升米と『日本書紀』の田道間守が、似ても似つかぬように見えてもローマ字で表示すると「似ているともいえる」ことを記した。

ここでもう一つ、似ていないようでも似ている例として、遣隋使として有名な小野妹子と、その隋での名・蘇因高とを比較してみよう。この両者は同一人物であることが明確なので、比較は参考になる。

シナの発音では、小野の小も野もSHOと読める。また妹子の日本での発音はIMOKOなので、これはIMKOまたはINKOに近い。SHOをSOとすれば、そ

のままSOINKO——すなわち蘇因高——となる。

蘇因高が隋によってつけられた小野妹子の呼び名であることは『日本書紀』の推古天皇紀に明示されているので、疑う余地はないのだが、漢字だけを見てこれを同一人物だと見破ることは困難である。

このような例からも、『魏志倭人伝』に書かれた名前を日本の古典のなかに見つける作業は、推理力が必要だし、かつあまり深く考えすぎてもいけないことがわかる。

したがって〈卑彌呼〉の読み方については、深入りは避けて、教科書や多くの学者の説にあるように、

「おおまかにヒミコまたはヒメコみたいな発音だった」

——としておかねばならない。

前述のように元来がそのていどの話なのだから……

では、日本の古い文献に、これに似た読みの人物がいるのだろうか？

これについては、

「いすぎるほどいる」

——というのが結論である。

昔の日本の文献に書かれている貴人の名は、つねにか

なり長いものなので、単に「ヒミコ」とか「ヒメコ」とかいう人物がいた可能性はほとんど無く、日本の役人が述べた名前のなかから覚えやすい部分を魏の使者が記録したか、あるいは日本の役人が自分の仕える上司を固有名ではない尊称で呼び、それが記録されたものだろうと、多くの人が考えている。

現在の美智子皇后陛下を、ただたんに皇后とか皇后陛下とか記すのと同じである。

社長秘書が来客に社長のことを告げるときも、「社長はいま会議中です」などと述べるだけで、その姓名を全部いうことはめつたにない。

したがって古代においても、特に身分の高い人物については、日本側の役人は、尊称のみで話した可能性がたかい。

フルネームを告げたこともあつたかもしれないが、会話のほとんどは、尊称だけであつただろう。

とくに死後は、諱イミナ（忌名）という習慣があつて、意識して実名を呼ばなかつたほどである。

また魏や帯方郡の役人も、フルネームでは発音が難しく、記憶も記録も困難で、簡単な尊称のみのほうがずっと親しみやすかつたであろう。

◎『記紀』にある〈卑彌呼〉の候補

では、日本の『古事記』や『日本書紀』に、そういう〈卑彌呼ヒミコ〉を連想させる尊称が出てくるのかというと、これが、無数に出てくるのである。

多くの学者や研究者が述べている〈卑彌呼〉の候補をあげてみよう。()内は代表的な読みである。

*

《日子》	(ヒコ)
《日御子》	(ヒミコ)
《日神子》	(ヒミコ)
《日皇女》	(ヒミコ)
《日巫女》	(ヒミコ)
《日靈女》	(ヒミコ)
《姫子》	(ヒメコ)
《皇女》	(ヒメミコ)
《女》	(ヒメミコ)

- 《姫御子》 (ヒメミコ)
- 《姫神子》 (ヒメミコ)
- 《姫皇女》 (ヒメミコ)
- 《姫巫女》 (ヒメミコ)
- 《姫命》 (ヒメミコト)
- 《姫尊》 (ヒメミコト)
- 《比賣命》 (ヒメミコト)
- 《日女命》 (ヒメミコト)
- 《稚日女尊》 (ワカヒルメノミコト)
- 《大日靈女尊》 (オオヒルメノミコト)

*

さいごから二番目の《稚日女尊》は〈天照大神〉の妹であり、最後の《大日靈女尊》は〈天照大神〉の本名で、靈女は合わせて一つの文字である。

これは白川静の『字通』によると靈と同じ字だそうであるが、古い神社の書き物などでは分けて靈女と書かれていることもある。

このおわりの二つは別格の尊称だが、その一つ前の《日女命》も、それに準じる丁寧な文字——太陽の妻を意味する——を当てた尊称である。

「ヒミコ」または「ヒメコ」を連想させる名前は、まだあるだろうが、これくらいでやめておこう。

この一覧のほとんどは、天皇の皇女の名につけられる尊称である。たんに尊称として使われるものもあるし、XXX姫命のように、長い名前の末尾につく場合も多い。また「姫」は「媛」としても同じだし、また「女」に変えても通じる。カナ表記では「比賣」もある。

「ヒメ」はもともとが神につかえる神子（巫女）的な女性に与えられた称号だが、祭政一致の時代においては、天皇の皇女など身分の高い女性が重要な神の神子となったので、高貴な出の女性を「ヒメ」と呼ぶようになったらしい。

語源をたどると、姫の「ヒ」は彦の「ヒ」と同じで貴い人物の名の接頭語であり、「ヒ」のうしろが「コ」なら男性、「メ」なら女性になったとされている。

さらにこの「ヒ」は、火と同じく日（太陽）と同源であるらしい。

要するに一覧表の名の頭にある「ヒ」は、すべて太陽から来た音で、畏敬すべき物や身分の高い人物につけられたのである。

これは、日神祭祀が重要だった古代の人々にとっては、

とうぜんの表記だったであろう。

「ヒ」や「ヒメ」のつぎにくる巫女・御子・神子・皇女・靈女など「ミコ」と読む漢字は、現在の感覚では書かれた文字によって意味が違ってくるが、祭政一致の古代にあつては、ほとんど同じ意味だったとされる。

神につかえる貴人の子——主に姫——または女性である。

そして漢字が使われるようになってから、皇女が尊敬されて御子と書かれ、神につかえる役目を与えられて巫女や神子と書かれ、別格の女性が靈女と書かれるようになったのである。

◎無数にいる〈卑彌呼〉の候補

さいごにつけられる命ミコトは、貴い身分の人物の名の末尾に、男女を問わずつけられる尊称であり、とくに高貴な人物の場合に尊ミコトと記す。

「ミ」は尊敬すべき存在をあらわしており、「ミコト」の語源は御事ミコトであるとされ、「みことのり」の御言ミコトにもつう

じる。

ここまで見てきた「ヒ」「ヒメ」「ミコ」はすべて一種の尊称であるが、そのきわめつけが最後につく「ミコト」なのだ。

このように見てくると、〈卑彌呼ヒミコ〉を連想させる『記紀』のなかの多くの名前は、最初から最後まで「尊称」であることがわかる。

さて、前掲の表の名は、それ自体ですでに〈卑彌呼〉と同じと思える読みのもが多くあり、それ以外も、わずかに変形しただけでみな〈卑彌呼〉になる。

だから、高貴な女性と分かる名前が「ヒミコ」または「ヒメコ」と読めそうなものを探してみようと『日本書紀』を繰ると、ほとんど数頁に一人は出てきてしまうのだ。

まさしく〈卑彌呼ヒミコ〉のオンパレードなのだ。

高貴な女性のほとんどは「・・・姫命」あるいは「・・・姫尊」などとされているが、この最後の二文字の読みは、「ヒメノミコト」または「ヒメミコト」だから、要するに貴い女性名の末尾はみな〈卑彌呼〉になつてしまふのである！

姫のかわりに媛ヒメや日女ヒメを使っても同じである。

そして、先の皇后陛下や会社社長のたとえで述べたように、その時日本のどこかに「xxx姫」という名の偉大な女性がいたとしたら、人々は、最後の姫に尊敬の尊ヒメミコトや神子をつけてたんに姫尊ヒメミコトあるいは姫神子ヒメミコと呼んでいたであろう。

つまり「・・・ヒメミコト」「・・・ヒメミコ」といった尊称つきの固有名詞を、「・・・」を略して「ヒメミコト」「ヒメミコ」という普通名詞で呼んでいたのだ。

*

以上のようなわけで、「ヒミコ」や「ヒメコ」といった読みの名前のみで「卑彌呼」を日本の古典から探して特定しようというのは、まったく不可能である。

いすぎるほどいるのだ。
そして同時に、

「へ卑彌呼」は姫尊ヒメミコトまたは姫神子ヒメミコの音写ではないか」

——との推理もまた、かなりの確実性をもっていえるのである。

五・二

《倭》と《大和》の語源

甲類・乙類の違い

この節では、古代にいわれていたらしい「ワ」という日本の呼称や《大和》の語源について、ざっと調べてみることにしよう。

そして同時に、《邪馬台国》と《大和》の類似性についても、検討してみよう。

◎「倭」と「和」の問題

『魏志倭人伝』は正式には『三国志』のなかの東夷伝のなかの倭人の条というのだが、いずれにせよ倭人という

言葉がでてくるし、さらに倭や倭国という言葉がでてくる。

つまり当時のシナ王朝では、現在の日本列島および朝鮮半島南端部のことを《倭国》と記し、そこに住んでいる日本人のことを倭人と呼んでいたのだ。

なぜそう呼んでいたのだろうか？

これについては、いくつかの説があるが、大きく分けて、

「ア」 漢や魏の役人が勝手に作ったという説。

「イ」 日本人が質問されてそう答えたという説。

——の二つになる。

前者の「ア」は、「倭」という漢字の意味が低いとか曲がっているとか遠いとかいうものなので、遠路はるばる日本を訪れた使者が日本人の醜い姿を見て、そう名づけたのだろう——というものである。

しかしそれはあまり説得力がない。

なぜなら、『魏志倭人伝』のなかの多くの国名は、みな日本での呼び方を漢字に当てはめて、日本人の発音に似た呼称で呼んでいるからである。

時代からシナでは日本のことを《倭国》と呼んでいたの
だろう。

そしてそれを知った古代の日本の知識層が、
「なるほど自分たちの国はシナ人によって倭と呼ばれて
いるのか、それなら我々もこの文字を使って「倭」と記
すようにしよう」

——と考えたのであろう。

ところで、古い文書を読むと、日本人は自分の国のこ
とを「倭」とも記しているが、それが次第に「大和」に
変化してきている。

なぜなのだろうか？

それは、日本人が次第に漢字の意味を勉強するようにな
り、「倭」は差別的な意味を持っていることがわかって
きたからだろう——といわれている。

古代の日本人はいろいろ考えた末、シナでの発音が似
ていて、かつとても穏やかで良い意味を持つ「和」を採
用して「倭」のかわりに使おうではないか——というこ
とになったのであろう。

「和」はやわらぐ、なごむ、友好的、楽しむ……とい
った日本人好みの意味を持つ漢字である。

この「和」を「ワ」と読むのはシナの音であるが、日
本古来の発音である「ワ」は、円、環、輪、回……と
いった意味を持ち、落ち着きのある語感の言葉である。
だから、「和」という漢字は、当時の日本人にとって、
元々の漢字の意味も、読みから来る日本語としての語感
も、ともにとても感じの良いものだったのだ。

この「和」の前に「大」をつけて「大和」という単語
をつくったのは、大和朝廷やその都がとても強く大きく
て立派だ——という自負心からだろうが、ひよっとする
と『魏志倭人伝』に記されている「大倭」にヒントを
得たのかもしれない。

◎なぜ「ヤマト」と読むのか？

ここまではなるほど——と思われるのだが、つぎに疑
問がうかぶのは、「ヤマト」という読みである。

『記紀』を読むと、「大和」だけではなく「倭」も「ヤマ
ト」と読むことが多かったらしいとわかる。

そしてその「ヤマト」という読みは、『邪馬台』の読み
とじつによく似ている。

《邪馬台》を「ヤマタイ」と読んでも「ヤマド」と読んでも「ヤマト」によく似ているし、ズバリ「ヤマト」と読むのだと唱える学者も多い。

だから、「ヤマト」なる読みの詮索は、日本国の語源論だけではなく《邪馬台国》^{ヤマタイコク}探しの面でもきわめて重要になってくる。

「大和」を単純に音で読めば「タイ・ワ」だし、訓で読めば「オオ(オホ)・ヤワラグ」などであり、どう工夫しても「ヤマト」なる読みは出てこない。

したがって「大和」と書いて「ヤマト」と読ませるのは、完全な当て字(当て読み)である。

では、どこからその当て読みが出てきたのだろうか？

もつともなつとくしやすい意見は、日本列島の盟主になった大和朝廷の先祖が住みついていた土地の名前が、漢字を知らなかったころからの純日本語で「ヤマト」と呼ばれていたからだろう——というものである。

またそれを自分たち一族の名前にもしていたのである。う——というものである。

そこで、大和朝廷の先祖がいた土地に、「ヤマト」なる地名が残っているかどうかを調べる段取りになるが、そ

れには、その土地がどこだったかを求めなければならぬ。

《邪馬台国》^{ヤマタイコク}に「九州説」と「大和説」があるように、大和朝廷の先祖の土地についても、最初から現在の奈良県の《大和》だったという説と、『記紀』に記されているように九州だったという説がある。

奈良県の場合には《大和》そのものなので、問題はその地名の意味やいつごろからそう呼ばれていたか——ということだけであるが、九州については「ヤマト」なる地名をもつ場所を探さなければならない。

それは、『記紀』にある高千穂の峰の近くや日向^{ヒムカ}の地には見つからないが、中北部には現存している。

福岡県の山門郡^{ヤマトグン}(ここに大和という町もある)とその近くの熊本県の山門^{ヤマト}である。

第六章でも説明するが、図6・2に位置を示してある。

神武東征説^{ジンムトウセイ}では、この地点が大和朝廷の先祖に係るとする考え方があり、《邪馬台国》九州説^{九州説}では、この二箇所のうちどちらかが《邪馬台国》だったとする意見が昔からある。

江戸時代の新井白石^{アライハクセキ}も福岡県の山門説を唱えていた。

地名は変化するので、九州の一部に「山門」なる地名が現存しているということは、昔は他の地域にも同様な地名があつた確率が高いことであり、高千穂のあたりや現在の日向のあたりにも「山門」があつた可能性がある。

また奈良県の《大和》も、本来は「山門」または「山処」といった漢字を当てはめるべき意味の「ヤマト」という地名だったのだろう——という説が多くの学者によつて唱えられている。

というわけで、「大和」とは本来の漢字の意味からすれば「山門」と書くべき言葉で、山の門つまり山への入口といった意味を持っており、これが、畏敬すべき山地の近くに住んでいた大和朝廷の先祖がその土地につけた名であり同時に氏族名でもあり、それをあらわす漢字として「倭」を改善した「大和」を採用することにしたので、「大和」と書いて「ヤマト」と読む一見奇妙な読みができたのであろう——ということになる。

これはなつとくしややすい推量であり、肯定する学者も多いらしい。

ただしちよつと問題もある。

それは、万葉仮名の研究などによつて、古代の日本語には同じ「ト」にも二種類あることがわかつており、その違いを検討すると、「大和」の「ト」と「山門」の「ト」は発音が異なっているので、語源が「山門」という説は成立しない——との意見があることである。

この発音の問題を《邪馬台》にあてはめると、それは「大和」には似ているが「山門」とは違ふとされ、《邪馬台国》九州説への反論にもなっている。

この古代の音韻の問題については、第二章で「神」と「上」は同源であろうと記したときに、古代の発音が違ふので別源だという説もあることを記した。

この古代の発音の複雑さに起因する議論は、《邪馬台国》論争においてよく出てくるので、認識しておく必要がある。

◎甲類・乙類の諸問題

そこで、名著として知られる渡部昇一『国語のイデオロギー』をもとにして、「神」と「上」を事例にとつて説明してみよう。

古代における「神」^{カミ}と「上」^{カミ}の発音の違いは、甲類・乙類という言葉で表されている。

奈良時代までの母音は、現代のアイウエオの五音ではなく八音であり、いまのイエオに似ているが少しちがう〈イ〉〈エ〉〈オ〉が加わっていた。

いまに残るカナで記せば、キエヲ（みるを）である。

これは『記紀』や『万葉集』などの表示から推察されるもので、これを乙類とし、現代のイエオに準ずる発音を甲類とするのである。

〈イ〉〈エ〉〈オ〉は、アルファベットの的には、ドイツ語にでてくるウムラウト（変母音）に類似したものである。

この変母音に子音がつくため、

キギヒビミ ケゲヘベメ コゴソゾト ドノヨロモ

——という二十（二十一という話もある）の音節が、甲類・乙類に分けられている。

問題の「神」は調べてみると乙類であり、また「上」は甲類であることがわかる。

この二つの単語では「ミ」の音が微妙に違い、「神」^{カミ}のミは微・未・尾と書かれているし、「上」^{カミ}のミは美と書かれている。

そこで、この二つの言葉は別源であって無関係だとの意見がでてくるのだ。

しかし、言葉が指し示す対象を次第に変化させてゆく過程でその発音も変わってゆくのは、ヨーロッパの言語でもいろいろと例があるとされる。

また古代の日本語でも、「日」^ヒ（甲類）と「火」^ヒ（乙類）が同源である根拠が古代文献にあるとされている。

したがって「神」^{カミ}と「上」^{カミ}は、発音は違っても、同源である可能性がある。

「神」と「上」については、現在でもいろいろな研究がなされていて、新しい非同源説もあるそうだが、いずれにせよ興味深い課題である。

つぎに、この甲類・乙類の区別を、「山門」^{ヤマト}と「大和」^{ヤマト}にあてはめてみると、

「山門」^{ヤマト}の「ト」は甲類
「大和」^{ヤマト}の「ト」は乙類

——となるので、この二つの地名（氏族名）は古代の発音が異なっていたことがわかる。

そしてこれが、「大和」の語源は「山門」ではないし、また九州の「山門」は大和朝廷の出発点ではない——との説に結びつくのである。

しかし、音韻がしだいに变化する例はたくさんあるので、これは一つの意見にすぎず、「大和」と「山門」は同源であるとする著名な学者も多い。

もうひとつ、「山門」に近い言葉に「山処ヤマト」がある。文字どおり山のある処トコロという意味だが、こちらのほうは「大和」と同じ乙類であり、したがって「山処」が「大和」の語源だという説もある。

(前記の『神皇正統記』で北畠親房は「山迹」説をとり、異説として「山止」説を紹介している。前者は山を歩いた足跡、後者は山への居住という意味だが、七百年も前の学説なので、ここでは参考にとどめる)

さて次に、この甲類・乙類の区別を、《邪馬台国ヤマトイコク》がどこにあったかの問題にむすびつけてみよう。

台は「ト」と読めるが、このように読んだとき、

「邪馬台ヤマト」の「ト」は乙類

で、「大和」の発音に等しい。

したがって、甲類乙類を峻別する意見では、
《邪馬台国》大和説

——となるし、また音韻変化を認める意見では、「山門」なる地名が九州にあるので、

《邪馬台国》九州説
——を否定すべきではない、となる。

ちなみに、『古事記』に記されたカナ書きの「ヤマト」は「夜麻登」で統一されているが、『日本書紀』のそれは十通りもあり、そのなかには、「邪馬騰」という、「邪馬台」にとっても似た音写文字もある。

また『万葉集』には「耶馬台」もある。
七世紀前半の『隋書倭国伝ズイシヨワコクデン』には、

「邪摩堆ヤマトに都する、すなわち『魏志』のいわゆる邪馬臺

——とあるので、「邪馬台」は昔のシナでは「ヤマト」にとっても近い発音だったとの印象をうける。

*

以上を総括してみよう。

甲類・乙類という古代の発音の違いは別問題として、「ヤマト」の語源としては「やまのあるところ」あるいは「やまへの入口である門や戸」という意味からきたという説が有力で、漢字で書けば「山門」あるいは「山処」などが語源であろう——という説が一般的である。

だから「ヤマト」は最初は山に近い場所、つまり神聖な山の麓の呼称であって、日本全体の名ではなかった。

日本のあちこちに「ヤマト」という地名があり、また氏族名があり、そういう氏族の代表が大和朝廷の先祖であった。

そして、奈良県の《大和》^{ヤマト}に本拠をおく大和朝廷が日本を統一したために、シナ式表記の「倭」のかわりに美しく「大和」と書いて「ヤマト」と当て読みする単語が、日本列島全体の代名詞になっていったのである。

和は倭の代わりなので、和のみで「ヤマト」と読むのが本来である。

したがって、大和を「オオヤマト」と読むことも多い。戦艦大和に祀られていたことで知られる《大和神社》^{オオヤマトジンジャ}がその例である。

《邪馬台国》との関係については、「邪馬台」も「大和」

も乙類で古代の発音は同じと想像されるので、《邪馬台国》が大和朝廷かその先祖の地《大和》であった可能性はきわめて高い。

しかし、それだけで奈良県の《大和》が《邪馬台国》であると決めつけることはできない。

九州の《山門》の音韻が変化して《邪馬台国》になった可能性も否定できないからである。

《大和》の地理の概略

前節で「ヤマト」についての語源論や《大和》と《邪馬台国》の発音の類似性について調べたので、つぎに、奈良県の《大和》の地理や地勢を頭に入れてみることにしよう。

◎大阪湾から奈良盆地へ

図5・1に、《大和》地方および、大阪湾から《大和》までの概略の地図を示した。

図の右側が奈良盆地または大和盆地であるが、この盆地のどのあたりに都（または宮殿）のおかれたかを、古い方からたどると、

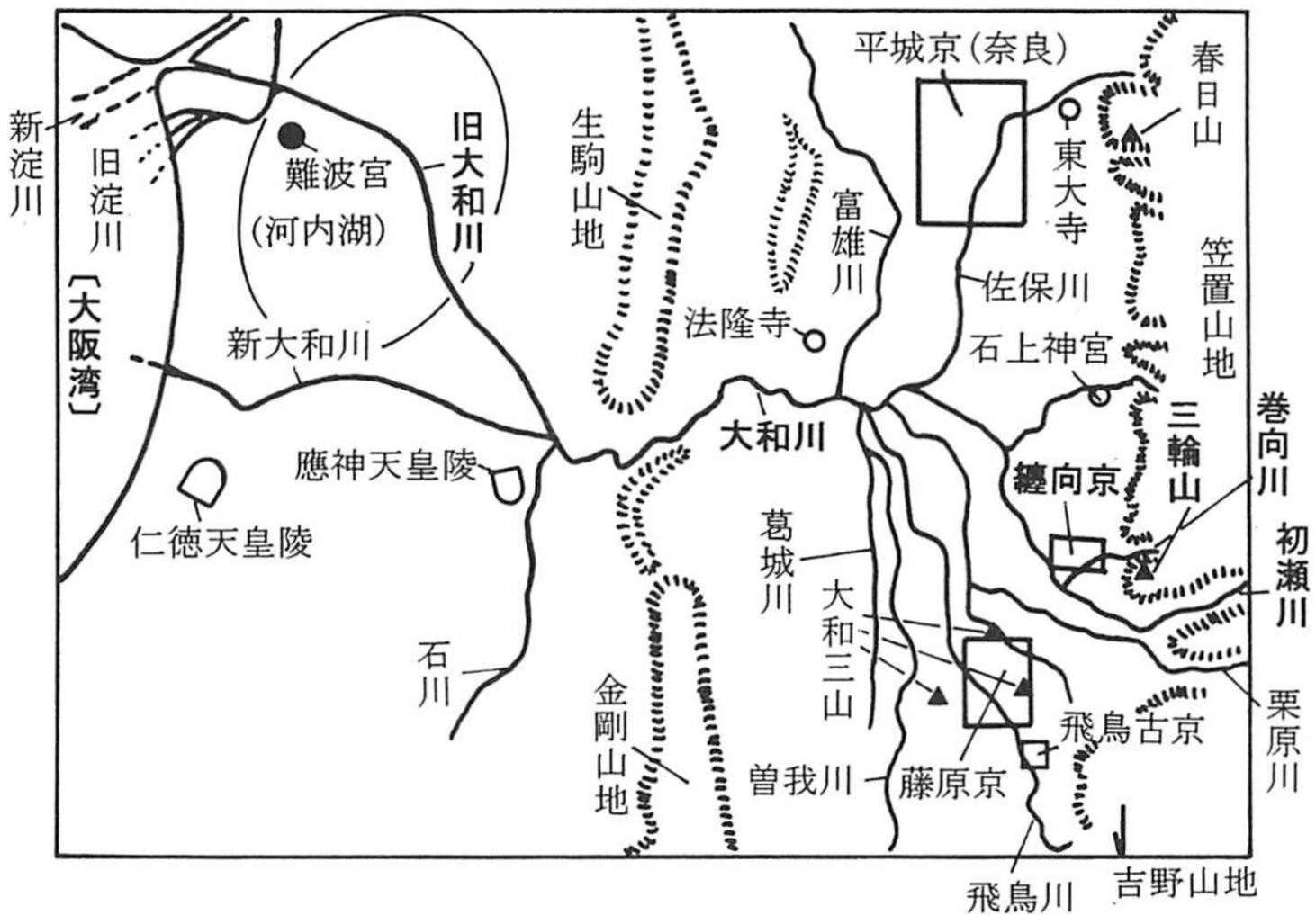


図5・1 大阪湾～奈良盆地の略図
(大和は海から船便の通じる交通至便な場所だった)

〔一〕初代神武天皇ゆかりの橿原（大和三山あたり）。

〔二〕第十代崇神天皇の磯城宮（桜井市金屋）から第十一代垂仁天皇をへて第十二代景行天皇あたりまでの都《纏向京》がおかれた《三輪山》の北西山麓（狭い意味での《大和》）。

〔《纏向京》は仮の名で、一般には纏向遺跡といわれている。大和朝廷最古の都があつた痕跡が つぎつぎに発見されている〕

〔三〕第十九代允恭天皇あたりから第四十代天武天皇のころまでの何回かの《飛鳥京》（飛鳥古京）。

〔四〕第四十一代持統天皇から第四十三代元明天皇までの《藤原京》。

〔五〕元明天皇から第五十代桓武天皇までの平城京（つまり奈良の都）。

——となる。

さらに土地勘を養うために、図の全体を見ていただきたい。キーワードは大和川である。

《纏向京》、《飛鳥京》、《藤原京》、《平城京》などは、いずれも、東南部にひろがる山地から流れ出る河川が大和川に合流するまでの、山の麓近くの平地にある。

とくに纏向・飛鳥・藤原などの都があつた盆地の中央

から南にかけては、古代においては湖または水郷のような場所であり、大和朝廷ができたころも、現在よりはるかに幅のひろい——数百メートルもあつたらしい——河川が多くあり、その間の微高地に集落や都市がつくられる、といった地形だったらしい。

このように山からの良質な水が豊富だと稲作にも適しているし、いろいろな意味で暮らしやすかつたであろうが、さらにもうひとつ、重要な交通上の意味があつた。

それは、右側の山地から流れ出る支流を合わせた大和川は、金剛山地と生駒山地の切れ目の部分を通じて河内の平野に流れ出て、難波宮（大阪城の近く）の北を通過して淀川に入り、大阪湾に出たのである。

現在の和歌山は新大和川と記された経路をとって堺市から海に入っているが、これは氾濫を防ぐために江戸時代初期、家光の時代になされた大工事によって切り換えられたもので、昔は北上して現大阪の中心地帯に流れていたのだ。

そしてこのことは、瀬戸内を通過して大阪湾に到着した船は、この大和川をさかのぼって《大和》まで直航できたことを意味している。

◎古代《大和》の水利の便

さらに（卑彌呼）^{ヒミコ}たちが活躍していた古代——弥生末期から古墳時代のころ——までは、現在の大阪湾のさらに内側が巨大な湖（河内湖と呼ばれる）となっていて、そこと大阪湾とは大きな水路でつながっていたらしい。

つまり、大阪湾の内側にさらに一種の湾——淡水と海水が混ざり合った汽水湖のような湾内湾——がある地形だったのだ。

したがって旧大和川は、奈良盆地を抜けでるとすぐにその汽水湖に入っていたと想像できる。

このように古代の《大和》は、周囲を山に囲まれた地域でありながら、海から直接船ですぐに行き着ける、交通至便の場所だったのである。

この水利の至便さは、盆地の南部だけでなく《平城京》のあった北部の奈良市あたりでも同じであり、大和川の支流のひとつ、佐保川^{サホカ}によって大阪湾から船便がつうじていた。

奈良の《平城京》が京都の《平安京》に遷都した理由

のひとつは、奈良盆地の隆起によって佐保川がせまくなって船便に不便になったことだといわれているが、隆起によって時代とともに不便になっていったのは、南部の《飛鳥京》《藤原京》などのあたりでも同様だったと考えられる。

隆起による湖や水郷や河川の消失は大阪湾近辺でもおなじであり、河内湖も姿を消してゆくが、もと水郷的な地形の名残はいまでもあり、土木工事の不十分な戦後まもなくは、大雨が降った日の大阪市内は水がでて歩けないほどであった。

奈良盆地全体にも、古墳時代まで水郷だった名残があり、年間の湿度変化がすくなく、したがって正倉院の御物の保存などに適していると、考古学者の樋口清之^{ヒグチキヨシキ}が指摘している。

《大和》のある奈良盆地とは、以上のように、水利に恵まれていて、船で瀬戸内海からすぐに到達できる交通至便の場所であった。

また仮に徒歩でいったとしても、大阪湾から《三輪山》^{ミワヤマ}の麓まで直線距離でマラソン距離以下なので、一日でじゆうぶんに着いた。

うねった道を通ったとしても、昔の人の健脚なら一日の行程である。

もうひとつ付記すると、『三輪山』の南麓を縫って東に向かうと、道はけわしくとも、何日か歩けば伊勢につき、そこから徒歩や馬で尾張や美濃（愛知や岐阜）まで行けるし、また船で湾を横切って対岸に上陸して東海地方に進むこともできた。

このように見てくると、『邪馬台国』大和説の『大和』とは、山々に囲まれた豊かな土地として『山門』や『山処』でもあるが、またどうじに、船でも徒歩でも海にすぐに出ることができ、努力すれば伊勢方面へのルートも確保できる、とても発展性のある地勢だったのだ。

しかも、この盆地への入口で通りやすいのは、金剛山地と生駒山地の間だけだから、外敵からの防備もしやすい場所であった。

さらに産物も豊富だった。

古代の重要品だった鉄や玉や朱の素材も産出していたし、農業にも林業にも適していた。

大和朝廷はじめ豪族たちが覇権をかけてこの奈良盆地——『大和』——で争ったのも、肯けることである。

加えて、この『大和』が『魏志倭人伝』の時代から開けた土地であったことを示す重要な発掘について記しておく。

その一つは、朝鮮半島製と思われる陶片が大量に発掘されていることである。

またもう一つは、福井県あたりの日本海沿岸から『大和』まで、危機を知らせる狼煙通信の施設が、すでに弥生時代にできていたらしい——という発掘報告があることである。

これらも、『大和』が『卑彌呼』以前から海外と交流していたことの傍証になるであろう。

◎奈良盆地南部の詳細地理

つぎの図5・2は、図5・1の右下部分——つまり奈良盆地の南部を拡大して精密に描いたものである。

以下の各章では、この図を元にして、いくつかの説明図を作成しているので、ざっと眺めておいていただきたい。

土地勘を得るために、JR線を描いてあるが、このほ

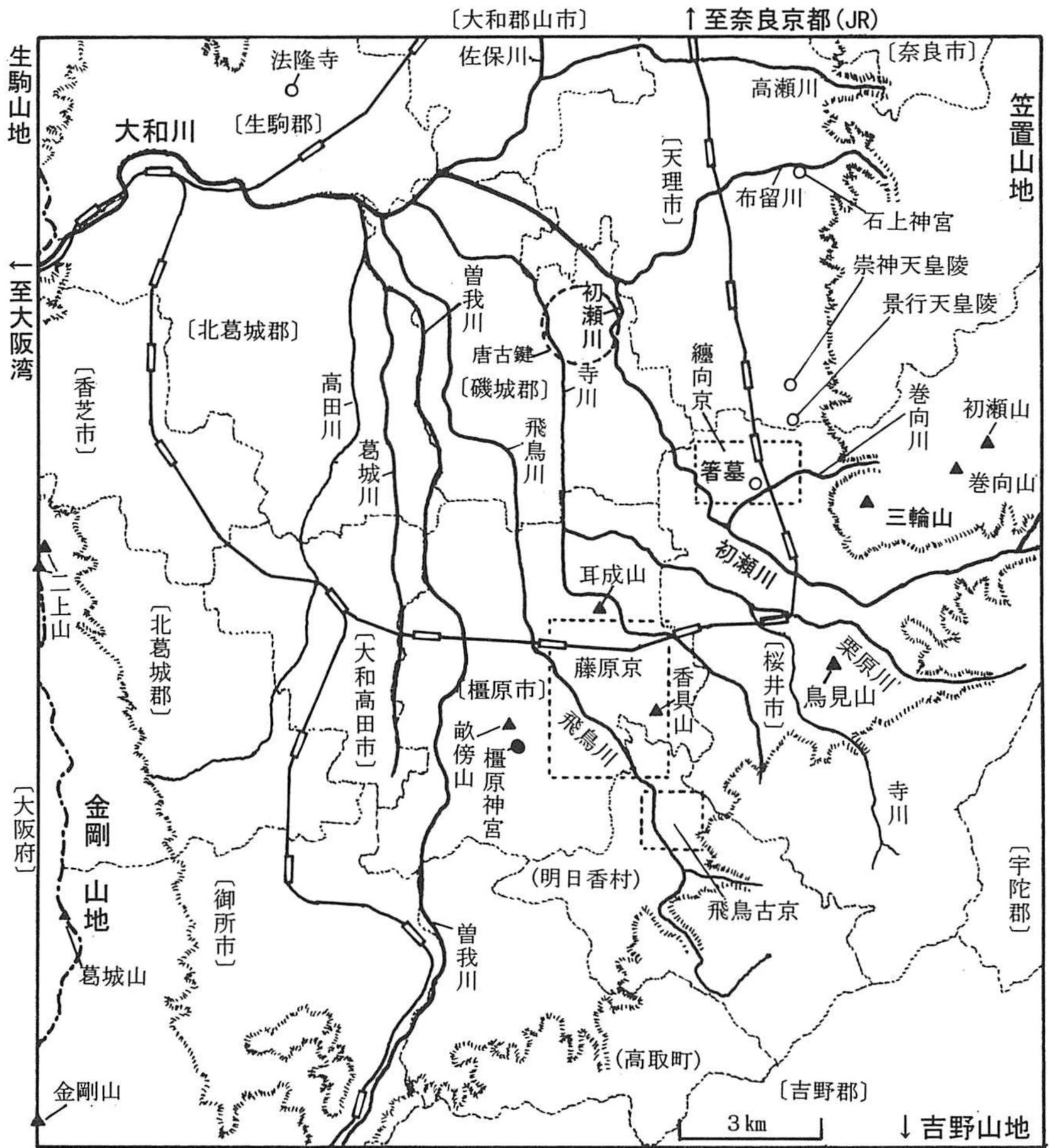


図5・2 奈良市近辺を除く奈良盆地の基本地図
 (〰 はその外側が山地であることを示す。
 河川・古墳・寺社などは最小限にした。
 線路はJRのみ描いたが他に私鉄がある。
 中央上の破線の円は「唐古・鍵遺跡」)

かに私鉄がたくさんあるし、道路も数多くあることは当然である。

河川も代表的なものしか描いていない。

このあとの多くの章で話題になるのは、初瀬川の両岸および寺川と初瀬川の間土地で、(卑彌呼)の時代の遺跡が無数にあり、それが初期大和朝廷の都や墳墓の跡だろうとされている。

(初瀬川は大和川の支流であるが、山に近いところまで大和川とも呼ばれている)

図の中央上部に、破線の円で描いた「唐古・鍵遺跡」があるが、これは弥生時代における日本でも最大規模の集落跡であり、大和朝廷の成立との深い関連が指摘されている。

また《三輪山》の北西山麓の《纏向京》は、第十代から第十二代にかけての天皇の都が造られたと考えられる遺跡で、時代的には『魏志倭人伝』とほとんど一致しているの、このあと再三にわたり、くわしく言及することになるであろう。

そのつぎの図5・3は、『日本書紀』などにしばしば出てくる、《大和》周辺の古い地名である。図5・2のさら

に中心地帯に書き込んである。

いちばん下の円は、神話の最後の部分にある、初代の神武天皇が即位されたという、畝傍山の麓の橿原である。

このあたりは、発掘によって檜の木(橿)があつたことが分かっており、したがって橿原の名に違わず、また河川——というよりも水郷——に突き出た小半島状の土

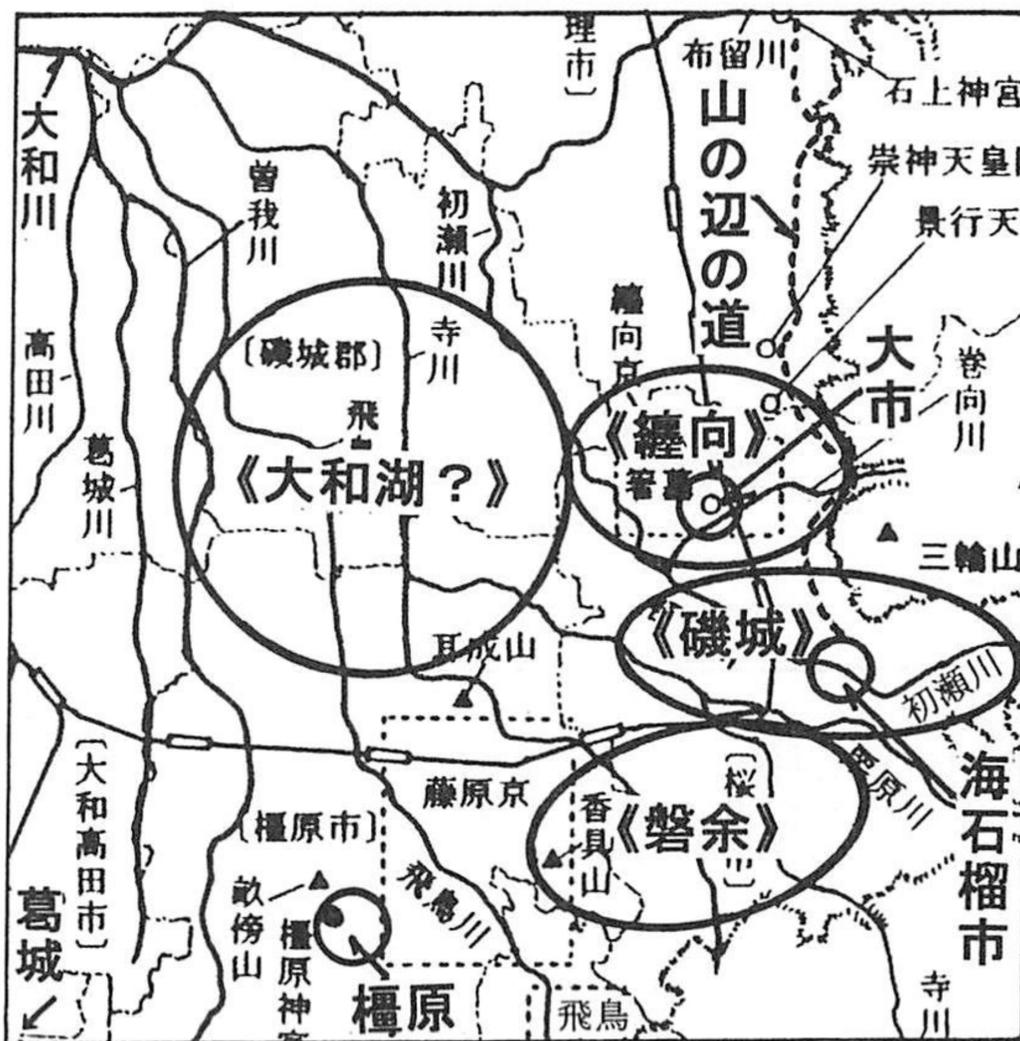


図5・3 大和地方の古代地名図

地で、船着き場などがあつたらしく、初代の宮殿にふさわしい場所だったといえる。

その右上の楕円が、磐余イワレである。この一帯は、初期の大和朝廷の勢力圏内だったらしく、神武天皇の国風諡号シゴウは神日本磐余彦天皇である。

またのちに何人かの天皇が宮殿をつくつたとされる場所でもある。

そのすぐ上の楕円の磯城シキは、神武天皇に最後まで逆らつたとされる八十梟帥ヤソタケルの拠点で、梟帥タケルが滅んだのちは大和朝廷の勢力圏内となり、のちに第十代崇神天皇スジンはじめしばしば宮殿がつくられた場所である。

おそらく防備によく住みやすかつたのであろう。

またその上の纏向マキムクは、第十代崇神天皇の宮殿のすぐそばであり、かつ第十一代垂仁天皇スイニンや第十二代景行天皇ケイコウの宮殿が置かれた場所で、数多くの遺跡が発見されているので纏向遺跡と呼ばれている。纏向とはこの地の古い村名である。

東西約二・五キロ、南北一・五キロという広大な面積にわたって、多くの遺構があり、祭祀跡サイシや運河の痕跡もあり、大和川にそそぐ巻向マキムク（纏向）川、初瀬川などを利

用して大阪湾と連結した開放的な古代の大都市だったと考えられている。

考古学の成果と『記紀』の記述とを総合して、すくなくとも崇神天皇の時代から垂仁を経て景行天皇の時代まで、三代にわたる大和朝廷の中心的な都だったことはまちがいない——と考えられている。

本書では前記のようにここを仮に《纏向京》マキムクと称しているが、いずれは正式にそのように名づけられるのではないかと、予測している。

◎水郷を囲む豊かな土地

その左に大和湖？——とした大きな円が描いてある。前述のごとく古く縄文時代には、この大和一带が大きな湖であり、土地の隆起によって次第に水が減って平地になったものの、大和朝廷の時代になっても、まだその跡が残っていた——という説があるので、描いておいたものである。

たしかに、縄文く古墳時代の遺跡は、この想定される湖の周囲に連なる形で発見されており、湖の中心部には

ほとんど無い。

明確な形での湖ではなかったとしても、このあたりが水郷であったことは確かと思われる。

この図の左下の外側で金剛山地コンゴウの右側あたりの広大な地帯が葛城カクラキで、そこは有名な豪族の葛城氏が支配していたといわれている。

大和朝廷がこの豪族を帰順させるために、婚姻政策などあれこれ苦労したあとが、『記紀』に多くみられる。

磯城シキのなかの海石榴市ツバキイチというのは、現在の桜井市金屋カナヤのあたりで、聖徳太子ショウトクタイシの時代に船で初瀬川まできた隋スイの使者裴世清ハイセイセイをここで迎えたという話がのこされている場所である。

初瀬川を船で上ってきてここで下船したのであろう。

またここは、歌垣ウタガキという、歌を男女でやりとりして睦み合う遊びがなされたことでも知られる場所である。

歌垣については、場所は不定だろうが、初瀬川岸に宮殿のあった第二十五代武烈天皇ブレルツと恋敵の鮪シビとの真剣勝負の掛け合いなどが有名である。

纏向マキムクのなかの大市は、もじどおり大きな市場があった

古代の繁華街ではないかと想定されている場所で、「《邪馬台国》大和説」で「卑彌呼」の有力候補の一人とされる「倭迹迹日百襲姫命」の墳墓《箸墓》（またはハシノミハカ）がある場所である。

《箸墓》は巨大な前方後円墳の最初とされる著名な古墳で、あとの章で詳述する。

《箸墓》はまたの名を大市墓ともいわれ、またこの付近から「?市」と墨で書かれた土器が発見されている。

宮内庁の正式表示も現在《大市墓》とされている。

これはまた、国々には市があつたという『魏志倭人伝』の記述とも暗合している。

右上に「山の辺の道」と書かれている道は、いまは大和めぐりの観光の道になっているが、日本最古の国道ともされており、《三輪山》の山麓から笠置山地の麓を縫って天理市の《石上神宮》を通過して北へ続いている。

このほか平野の中心部には、直線的な古代の道が何本も作られたらしい。

地図の説明が長くなってしまったが、このように《大和》はその土地自体が豊かで資源も豊富で暮らしやすいばかりではなく、想像以上に交通も便利で、かつ防備に

も適した場所であった。

そして、畏敬すべき山々の近くであるので「ヤマト」と呼ばれていた。

「ヤマト」という呼称が最初から《大和》の地にあったのか、それとも九州などから持ち込まれたのか、あるいはその両方なのかは分からないにしても、『記紀』ができる前からそう呼ばれていたことは間違いない。

そしてここに、縄文時代から生活していたり、弥生に入って外部から進入したりして拠点をかまえた多くの豪族がいた。

それら豪族のなかでもとくに強力だった大和一族が弥生後期に急速に成長して、大和朝廷を建設し、西の九州から東国までを従えるようになった。

そこで自然のうちに、日本そのものをあらわす「倭」や「大和」と、ヤマト地方の「ヤマト」とが一体のものになっていった——というわけである。

*

円形の湖があったという意味ではない。

このあたりが水郷だったらしい、という意味であり、その水郷はもつと北まで延びていただろうと、推測される。

なお、図5・3の《大和湖？》は円になっているが、

五・四

《日本》と「天皇号」の由来

◎ 《日本》という国名の発祥と歴史的意義

さて、これまでに述べた《大和》^{ヤマト}が次の段階で《日本》^{ニッポン}となつたのだが、それは、良い意味を持つ《大和》といえども、その元は差別的な《倭》^ワであり、いくらいいかえてもシナから輸入された名前にすぎなかつたからであらう。

聖徳太子^{シヨウトクタイシ}の時代や大化改新^{タイカノカイシン}のあたりまで来ると、日本人としての気概がみなぎってきて、シナ皇帝から与えられた名称では満足できなくなり、かつ天皇やその周囲の人たちも、かならずしも「ヤマト地方」出身とはいえなくなり、別の名前を考えるようになってきたと思われる。

そこで出てきたのが、《日本》という漢字で書かれた国名である。

ここで使われている漢字「日」の訓である日^ヒという言葉は太陽を意味していても日本人の好みに合った神聖な雰囲気があり、歴代の天皇の名にもじつに多くつけられている。

また《天照大神》^{アマテラスオオミカミ}の尊称のひとつが「日神」^{ヒノカミ}であることから、「日」のもつ特別な語感が理解できる。

推古天皇^{スイコ}の皇子で摂政として実質的な最高指導者だった聖徳太子（六世紀末〜七世紀初）が、西暦六〇七年に小野妹子^{オノノイモコ}を遣隋使^{ケンズイシ}として派遣したときの国書に、

「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」^{ツツガ}

——とシナ皇帝の煬帝^{ヨウダイ}に述べて册封体制^{サクホウ}からの離脱宣言——すなわちアジアで最初の独立宣言——をし、不快にさせたというエピソードの出来た時点でその構想が明瞭になり、大化改新（七世紀中葉）のあたりで太陽の昇る所といった意味の《日本》^{ニッポン}が確立しはじめ、七世紀末の天武天皇・持統天皇^{ジトウ}のころの律令のなかに定められ、

八世紀初頭には遣唐使^{ケントウシ}によつて唐の都に伝わつたようである。

この《日本》の読みは、古来からの日本語では——つまり訓では——「ヒノモト」であり、伝統的には当て読みの「ヤマト」であるが、シナ人にも読んでほしいので音読みを採用して、しだいに「ニッポン／ニホン」となつてきたのであろう。

なお当然のことだが、さらにずっと昔から日本^{ヒノモト}という地名はあり、とくに大化改新の結果の都である難波^{ナニワ}地方に有つたらしい。難波の都から見ると、その場所から太陽が昇るように見えることから、そういう地名がつけられた——と推理する学者もいる。

だから、そういうことにヒントを得て、《日本》という国名を考えたのかもしれない。

ではシナ王朝ではどうだったかというところ、ずっと「倭^ワ国」といつていたのだが、八世紀の初めに《日本》という名が伝えられてからしばらくしてそれを認め、そのうち次第に《日本》と記すことが多くなり、十世紀ごろには定着したようである。

九世紀に撰述された『舊唐書^{クワウタウジヨ}、倭國日本傳』に、

「日本國ハ倭國ノ別種ナリ。ソノ國日邊ニアルヲ以テ、故ニ日本ヲ以テ名トス。或イハ云フ、倭國自ラソノ名ノ雅ナラザルヲ惡^{ニク}ミ、改メテ日本トナスト。或イハ云フ、日本ハ舊^{モト}小國、倭國ノ地ヲ併セタリト」

——とあり、また明代にできた『元史、外夷、日本傳』に、

「日本國ハ東海ノ東ニ在リ。古ク倭奴國ト稱フ。或イハ云フ、其ノ舊名ヲ惡^{ニク}ム。故ニ名ヲ日本ト改ム。其ノ國ノ、日ノ出ヅル所ニ近キヲ以テナリ」

——とある。

シナ大陸や朝鮮半島から見て太陽が昇る方角だということも——聖徳太子の文面などからみて——あるだろうが、外国に対してそんな偉そうな事ばかりいつていたわけではない。

属国ではない、対等な国である——と主張し、毅然と

した態度で、侮蔑的な意味の「倭国」という名称を改めさせたのである。

なお前記のシナ正史をみると、十世紀前後になってもなお、日本列島の地理的理解はあいまいであり、倭国を併せて大きくなったとか、東の海にあるとか、古くは倭奴国と呼ばれていたとか、誤解が大きいことがわかる。

こういう正史記事からも、『魏志倭人伝』時代のシナの歴史家が、日本列島について正確な地理的認識をもっていたとは、とても思えない。

本章のトビラ部分に記した山上憶良ヤマノウエノオクラの歌は、遣唐使ケントウシの一員として唐トウにわたり、西暦七〇四年に帰国した憶良が、唐の都で詠んだ有名な望郷歌だが、原文にも「早日本邊」と記されている。

◎「天皇号」の制定とその歴史的意味

さてここまで、《大和》や《日本》の由来を述べてきたが、《日本》という国名を自称するにいたった精神的自立

はまた、「天皇」という日本独自の称号を生んだことも、記しておかねばならない。

昔のシナ王朝の周辺国の指導者は、どこの国でも「王」であり、シナの皇帝のお墨付きをもらってそれを権威としてその地を支配する冊封体制サクホウに組み込まれていた。「王」とは皇帝にくらべてずっと低い称号である。

それは日本も同様であり、一世紀に倭奴国の王ワノナコクがもらった金印にも「漢委奴國王カンワンナノコクオウ」とあるし、『魏志倭人伝』に記されている〈卑彌呼〉ヒミコがもらった詔書にも、「親魏倭王シンキワオウ」とある。

倭奴国の時代と《邪馬台国》ヤマトイコクの時代との間にも、何回か日本の西方の豪族がシナ王朝に朝献して「王」というお墨付きを貰うことがあったらしい。

朝鮮半島の各国はもちろんそうであった。

ところで、古代の日本国内における豪族（氏族）たちの貴人や首長の呼称は、前述した尊称を用いて「ヒコ」「キミ」「ミコト」などといったらしい。

そして大和一族の長の場合には、多くの豪族の中の特別な豪族の長という意味で、「キミ」の前に「大きい」をつけて「オオキミ」といったり、「ミコト」の前に「統スべ

る」をつけて、「スメラミコト」といつたりしていたらしい。

これを漢字で書くと、『記紀』よりかなり前の時代ではやはり「王」であり、特例として「大王」である。

だから初期には豪族の長も大和一族の長もすべて「王」であり、大和朝廷の最高の位を「大王」と漢字で書くのは、五世紀ごろからといわれている。

しかし、日本列島の統一がすすみ、文化も向上し、シナ王朝を中心としてその支配に甘んじる冊封体制から独立しようという気概が漲ってきた六世紀以降、日本の指導層が、シナの皇帝のはるか下の位である「王」や「大王」という文字に満足できなくなったのは当然である。

そこで、シナの皇帝に匹敵する尊称は無いかといろいろ考えた末、七世紀に入るころから「天皇^{テンノウ}」という称号が登場してくるのだ。

さきの西暦六〇七年の国書にある「日出ずる処の天子……」の天子とは皇帝の尊称としての別名なので、日本の側が「天子」を用いたということは、日本の最高指導者はシナの最高指導者の皇帝と同じ地位であって下の身分ではない——という意味を具体化したものであり、

すでにこの時に「天皇号」の下地ができていたと考えられる。

『日本書紀^{ニホンシヨキ}』によると、聖徳太子^{ショウトクタイシ}の時代の何回かの外交交渉のなかに、西暦六〇八年の小野妹子^{オノノイモコ}の隋^{スイ}への派遣があるが、そのときの日本側の国書に、

「東の天皇、敬^{ツツシ}みて西の皇帝に曰^{モウ}す」

——とあるので、この時代に天皇号が登場したらしいと推測できる。

しかしもちろん『日本書紀』は八世紀初頭の書なので、これだけではほんとうの証明にはならない。

そこでさまざまな学説が出され、古い方の意見としては六世紀から七世紀にかけての推古天皇^{スイク}の時代（聖徳太子の時代）という説、もつと後だとの意見としては、七世紀後半の天武天皇^{テンム}や持統天皇^{ジトウ}の時代とする説がある。

さいきんは考古学の進展が著しく、その知見をもとにすると、どうやら推古天皇の御代の中頃に天皇号がきまったらしい。

そしてその訓読みには、前記のような、「統率する尊」という意味を語源とする「スメラミコト」が用いられたのである。

◎「年号」の制定と日本人の気迫

これに関連してもうひとつ強調すべきは、天皇号の制定と同時期に、「年号」も日本独自に定めたことである。

その最初は、孝徳天皇コウトクのとき、その即位の西暦六四五年を元年とした「大化」ダイカであった。

有名な大化改新ダイカクサイシンの年である。

以後平成の今日まで、日本独自の年号が続いている。

シナ王朝の年号を使用して年代を表現するのが普通だった当時のアジア諸国のなかで、わが国だけが年号もまた独立を宣言したのだ。

これら、

《日本》という高貴な国名の決定、

「天皇」という皇帝に並ぶ称号の決定、

「年号」の日本独自の制定、

——は、たとえば、アメリカ合衆国がイギリスから

独立し、インドネシアがオランダから独立したのと同じくらいの、日本国の独立運動だったのである。

そして、アジアの国々のなかで、このようなシナ王朝からの独立を果たしたのは、近代にいたるまで、日本のみだったことも、再度強調しておきたい。

朝鮮半島の王権なども、ずっとあとの時代まで、「王」と称して、けっして「皇帝」とならぶ称号はつけていない。つまりシナの皇帝の下位に甘んじていたのだ。

明治になって近代国家としての体制をつくった一環として、国旗と国歌の制定があるが、これについては、平成十一年の「国旗・国歌法」の施行に伴って数多くの解説書が出されたので、ここでは省略する。いずれも誇るべき古い歴史をもっている。

*

冊封体制サクホウからの独立と名称の問題が長くなってしまったが、『魏志倭人伝』や『日本書紀』を検討するさいに、きわめて重要な背景となることだからなので、お許しいただきたい。

次節では、『魏志倭人伝』キシワジンデンの信憑性シンビョウセイについての話をまと

めてみることにしよう。

五・五

『魏志倭人伝』の信憑性 についての結論

この節では、前節までの知識を背景にして、第四章に記した『魏志倭人伝』の信憑性についての検討結果を、補足し整理してみることにしよう。

まず第四章の結論をまとめてみる。

「一」又聞きの情報性（第四・一節）

「熱意不明の使者が実力不明の通訳を介して聞いた記録の又聞きや書写という文献に、どれほどの信憑性があるのか？」

「二」地理的な信憑性（第四・二節）

「不正確な地理的知識を元にして書かれた文献に、どれ

ほどの信憑性があるのか？」

「三」シナ正史自体の信憑性（第四・三節）

「周辺国については伝統的に侮蔑的で間違いの多い正史を書くシナの古い史書中のごく短い文献に、どれほどの信憑性があるのか？」

この三つによって、もし『古事記』や『日本書紀』を一級の史料だとすれば、『魏志倭人伝』とは二級三級の史料にすぎない——という樋口清之らと同じ結論が導かれる。

『古事記』や『日本書紀』、およびこれら『記紀』のもとになったといわれるいくつかの古い日本の史書は、量的に圧倒的であるだけではなく、古代日本人の「心」が感じられ、またじつに生き生きとした「人間模様」が感じられる。

四百年のひらきがあるとはいえず、多くの日本人が伝承し口伝してきた記録の集大成であり、その迫真力は『魏志倭人伝』の比ではない。

またそこにある固有名詞は現在の日本地図の位置関係やいまに残る地名や神社名とよく一致しているし、記述も考古学の成果と合致することが多い。

もちろん、そうかといって著者は、『魏志倭人伝』を無視すべきだ——と主張するわけではない。

それは、つぎの四つの理由によっている。

*

(一) 年代の信憑性

「シナの正史における他国の記述の信憑性は薄い、自国に朝献に来た使者や他国に派遣した使者についての、年号で記した年代は、比較的信用がおけるし、年号と西暦の換算も信憑性がある」

(二) 女王の存在感

「女王の記述に奇妙な存在感がある。とくに男王と対比させているので、当時の日本に女性の権力者がいたのは確からしく思われる」

(三) 作為の必要性の無さ

「侮蔑的な表現がされているし記述も数値もあいまいだが、当時のシナ王朝にとって日本は、今とはちがって競争相手ではなかったから、ことさら事実とちがう日本像

を創作する必要性もなかった」

(四) 唯一の外国文献

「三世紀ごろの日本について書かれた、現存する唯一の文献なので、信憑性の有無は別にして、無視することはできない」

*

したがって著者としては、『魏志倭人伝』は、「一」～「三」の理由によってB級史料にすぎないが、そうかといつて(一)～(四)の理由により、無視すべきでもない——と考える。

それは、『古事記』や『日本書紀』を補足するいくつかの——『古語拾遺』コゴシユウイ『先代旧事本紀』センダイイクジホンキ『風土記』フドキ『万葉集』マンヨウシユウなどの——史料の一つとして頭に入れておくべきであろう。

だから大切な事は、『魏志倭人伝』の数値や事項自体のことこまかな詮索ではなく、『記紀』の類や古い神社や古い地名や古い伝承などにある古代日本人の「心」と、考古学的研究とを結びつけ、その成果によって『魏志倭人

伝』を解釈することであろう。

そしてそれには、科学技術に詳しい人材を大量に投入しなければならぬ——と思う。

ハイテクを駆使した科学技術的感性に基づく研究こそが、推古^{スエイク}天皇以前の神話的な時代の真相に近づく、最善の方法ではないだろうか？

*

付言するが、以上のように考えてくると、現行の多くの歴史教科書における『記紀』と『魏志倭人伝』の扱いは本末転倒であり、とても奇妙なものに思える。